

バウムテストの変法に関する一考察

—バウムテスト文献レビュー（第四報）—

On revised methods of the “Baumtest”

—a review of the “Baumtest” IV—

佐渡忠洋¹⁾・別府 哲²⁾

SADO Tadahiro and BEPPU Satoshi

抄録

本稿では、わが国で報告されたバウムテストの変法を概観し、各変法の特徴と研究知見の問題を検討する。変法は、主として教示に変化を加える「バウムイメージ操作法」と、用具などの物理的な条件に変化を加える「描画条件操作法」とに大別して論じた。また、このどちらにも分類できない報告は、通常のバウムテストの臨床的活用と考えられるものであり、「バウム療法（仮称）」とでも総称できる報告であった。変法は、心理臨床家が臨床実践の疑問や工夫から考案されたものであるから、考案者各々の臨床観と分けて考えることはできない。しかしながら、それらの「知」は、考案者のみで洗練させていくことは難しく、考案者を離れて検討されることも必要である。したがって今後、他の研究者が変法を取り入れ、批判的に（数量的にも質的にも）検討されることが求められている。

キーワード：樹木画・教示・枠づけ・彩色（色彩）

I はじめに

バウムテストは一般に、描き手に対しA4版画用紙（白色で白紙）と4B鉛筆を渡して、「実のなる木」を描くよう求める（以下、これを通常法とする）。これに何らかの工夫を加えることで新たな形のバウムテストを用いることができる（以下、これを変法とする）。通常法から変法への発展は、どの心理技法でも生じる。それは心理臨床家らが臨床場面の多様なニーズに対応しようとするためである。すなわち、心理臨床家が通常法を自身の臨床手法としてより実践的に活用すれば、何らかの変法に自ずと辿り着く、ともいえる。

鶴田（2005）は、変法は“教示を変えるもの、教示を変えて複数回施行するもの、条件を変えて複数回施行するものの三タイプに分けられる”とし、いくつかの先行研究をレビューしている。しかし、現今までにどのような知見が積み重なってきたかなど、詳しい検討は行われていない。

そこで本稿では、わが国で報告されたバウムテストの変法に関する報告を概観し、各変法の特徴を検討する。そして、それらの数量的・質的に検討されてきた知見を整理し、各変法の課題を明らかにしつつ、今後のバウムテスト全般に求められる研究領域を考察する。

II 方法

1. Kochの変法の見解

バウムテストを体系化したKoch, K.（1957／2010）は、すでに変法に言及していた。教示に関するものでは、“学校で習ったような形が描かれたり、あまり得るところのない形が描かれた場合、あるいは、別の側面や層を調べようと思うときには、繰り返し描いてもらう場合があり、時に2度以上繰り返しってもらうこともある”とし、その時の教示は「果物の木をもう一度描いてもらえますか。ただし、既に描いていたのとは全く違う木を描いて下さい」にすると述べ

1) 岐阜大学保健管理センター / Health Administration center, Gifu University

2) 岐阜大学教育学部 / Faculty of Education, Gifu University

ている。さらに、枝のない球形樹冠のバウムが描かれた場合には、「樹冠を枝で表した果物の木を描いてもらえますか」と工夫することを記している。

また、“鉛筆描画の白黒の描写では、着色が単なる明暗の変化の上に凝縮されている。色のついたバウムを描かせるのも当然考えられる。色彩の戯れを別の方法でもっとうまく引き出せる（たとえば、オシロイバナの描画など）可能性はあるが、それは別として、バウムテストは、彩色によっておそらくさらに豊かになるだろう”とも述べている。

以上のように、Kochは変法の可能性を当初から指摘していた。しかし、テキスト第3版を出版後、すぐ逝去したため、変法の研究は後人に託された。

2. 本稿の切り口

本稿では、筆者らがこれまでに作成した文献一覧（佐渡・坂本・岸本ほか，2010）と、その後報告・検索された邦文献の中から変法を扱った論文を抽出し、検討の対象とした。

変法は明確に分類し難い多様な特徴を有する。そこで上述したKochの言を参考に諸論文を吟味し、本稿では便宜上、「バウムイメージ操作法」と「描画条件操作法」に大別して論を進めることとした。前者は、通常法とは異なる教示を用い、バウムの想起にある方向付けを行うことで、通常法とは異なるバウムのイメージを惹起させ、新たな側面が表現されることを期待するもの、と考えることができる。一方後者は、用具に何らかの物理的な工夫を加え、通常法とは異なる条件で表現を求めることで、新たな体験が開かれることを期待するもの、と言える。しかしこの分類では、通常法の後に行う変法の特徴や、複数回の描画を行う変法（例えば2枚法など）の経験（何かしらの効果など）に関する要因（特徴）は十分検討できない。その点に関しては、描き手の体験や経験に関するレビューにおいて詳細に論じる予定であるので、本稿ではそれらの要因を除外した。

III バウムイメージ操作法

1. 通常法における教示の揺れ

最初にわが国の教示の特徴を論じる。

Kochの「Obstbaum」を「果樹」ではなく「実のなる木」と訳したのは、バウムテストを導入した研究者たちの大きな業績である（国吉・小池・津田ほか，1962）。しかし、心理学における教示が“実験やテストにおける被験者に与えられる課題の説明”であって、“被験者への課題の設定であり、条件統制に関係している一つの要因”（嶋田，1999）であるにも関わらず、通常法にはいくつもの教示がある。それは、「実のなる木」や「木」、「木の絵」のように描くよう求めるバウムの呼び名が定まっていないこと、本数を限定するか、「上手に」や「全部」と描き方も指摘するかどうか、である。教示に関する研究はいくつか行われてきたが（津田，1976；山本・武田，1976；高見・中田，1978；青木，1982；大辻・塩川・田中，2003），中島（2002）が117編のバウムテスト研究を検討した結果から、国吉（1970）の「実のなる木を1本描いて下さい」が統一教示として相応しいと結論したのは、本技法が導入されて40年も経った時である。したがって、上述の細かい教示がバウムにどのような影響を及ぼすかは、未検討のままである。

2. 筆者らの臨床経験から

中島の統一教示に異議を唱えるわけではないが、筆者らは、「1本」を除き「実のなる木を描いて下さい」の教示を用いている。その理由は第1に、本技法の自由度を高めるためである。単数形と複数形とを区別しない「木」という教示で2本以上のバウムを描くことは、それ自体がその描き手の特徴を反映している。そのため、本数の限定はせず、2本以上描かれた場合には、描き手固有の表現として理解すればよいのではないだろうか（心理アセスメント的側面を強調したい場合は別かもしれないが）。筆者らの経験では、青年期を中心に個別法と集団法とでバウムテストを約400名に行ってきた、「1本」と教示せず2本以上のバウムを描いた者は1名のみであった^{註1)}。

第2に、特にこちらを強調したいのだが、「1

本」を加えることは描き手がイメージを膨らませる体験をかえって複雑にすると考えるためである。「実のなる」という“形容句は被験者にとって程よい意外性を持つ”（岸本，2010）。教示を伝えたと「実，実ですか？」と聞き直す者もいれば、「実のなる木…実のなる木…」と繰り返す者もいる。この特異な刺激語は、描き手に外在の樹木をそのまま描写することを妨げる。そして、描き手は自らの内的世界（個人的体験）を巡り「実のなる木」のイメージを探索させられ、描かれるバウムにはその人自身が漏れ出し、バウム描画が体験的なものとなる。この点に関して林（1973）は、Koch（1952/1970）が当初「葉のついた木を描きなさい」、「木を描きなさい。ただし松の木でないこと」、「実のなる木を描きなさい」の三つの教示から、「実のなる木を描きなさい」が最も適当としたことに言及した後で^{註2)}、「木を描きなさい」よりも「実のなる木」は自由度が低くなるが、被験者は自我の発動方向に一定の枠が与えられ、その枠の中でいかに自己（木）を表現するかが迫られるので結果の解釈が容易になる、と述べている。筆者らは、そのことで結果の解釈が容易になるとは考えていないが、「実のなる木」が絶妙な刺激となっていることは、多くの研究者が認めるところであろう。しかし、そこに「1本」との教示が加わると、描き手が受ける心理的なアクセントは「≪実のなる木≫を≪1本≫描いて下さい」となる。「実のなる木」という刺激によって、描き手の心理的なベクトルを彼らの内面に向けられるにも関わらず、「1本」という刺激がその動きを妨げてしまう可能性がある。したがって、「1本」を除き、教示は簡潔にした方がよいのではないかと、筆者らは考えている。

教示の微細な問題を考えると限りがないので、変法の概観に進むこととする。

3. バウム形態の変化を求める変法

Kochも述べているが、通常法で行った後、「前とは（1枚目とは）なるべくちがうようにして」などの教示を加え、再度バウムを描くよう求める変法がある。いわゆる「2枚法（2枚実画法）」や「三本の木」（青木，1980；Waser，

2000），後述する「夢の木」の中でも用いられるが、明確にバウム形態を変えるよう求めるものを、この変法と考える。

青木（1977）は、この変法を描き手に内在するバウムイメージの多様性を捉えるために積極的に用いている。数量的な検討から、1枚目のバウム形態と60～80%と高い一致率があるとの報告と（一谷・津田・山下ほか，1985），樹種や樹形が変化すれば描画全体も大きく変化するとの報告があり（青木，1980，1984），信頼できるデータは十分示されていない。また、「同じ木でもいいですし、別の木でもいいです」と、描き手に形態を変えるよう必ずしも求めない研究は多く（例えば，三船・倉戸，1992；佐藤・鈴木，2009），この変法と分類できる論文はわずかである。

この変法の特徴は、最初のバウムを描き手自身に「否定」させ、新たな表現を求める点である。しかし、上述した報告のみでは、この変法の特徴が明らかになっているとは言い難い。筆者らは、この変法は単純で簡潔な教示が特徴であり、描き手の新規課題への対応様式を捉えることができるとの印象を得ている。また、バウム形態を通常法と比較することで、バウム全姿の内どの部分に描き手の意識的な操作が関与するか（表現と意識レベルとの関連）を検討できるとすれば、この変法は通常法の発展にも寄与するであろう。

4. 夢の木

Stora, R. は4枚連続して描かせる方法の3枚目に「夢の木」を描くよう求める方法を考案した。これが嚆矢であるが、その後Castilla（1994/2002）は、Storaの方法を再構成し、3枚法の3枚目に「夢の木」を描くよう求めている。わが国では阿部（2002）によって紹介され、発表された報告はすべてCastillaの方法が採用されている。

「夢の木」は1枚目と2枚目のバウムと比較して解釈するが（阿部，2004），通常、この変法には「空想（ファンタジー）、欲求、願望」が表現されやすい（桑原・前田・重本ほか，2003）。これまでの数量的な検討から、通常法に比べ、

小学校1～6年生で「擬人的な木（人のように見える木）」を描く者を増やし、小学校高学年では顔がある「擬人的な木」を多く出現させる（松岡，2008）。さらに、内向的な大学生ではCastillaのいう外交的なサインを多く出現させ（山崎，2007）、青年期の描き手では心的外傷体験のサインとされる幹表面の「ウロ」や「傷」、「裂けた幹」、「切られた枝」などが多く出現させること（佐々木，2008）が示されている。質的な検討では、事例報告が行われ（阿部，2004）、非行臨床における有用性（桑原・前田・重本ほか，2003）が指摘されている。

「夢の」と形容することで、描き手がバウムイメージを想起する際、規定枠や制限を減少させ、表現の自由度を増加させる点がこの変法の特徴であろう。上述の研究は、バウム形態をサインアプローチによって検討したものであるため、今後は、ボトムアップ形式の研究によってバウム形態が比較されることが必要であると考えられる。治療論に立つ活用法も、より模索されるべきかもしれない。

5. 中園による一連の変法

中園はバウムと人間との関連に注目して樹木心理学を提唱した（中園，2005）。彼は“樹木画法ではあまり注目されていない樹木の根の部分を意識的に描く工夫をすれば、根を含めて描かれた樹木全体から、より多くの有益な情報が得られる”とし、根を強調した教示法を考案した（中園，1996）。これは、通常法の後の2枚目に「今度は、木の根っこをかいてください」と指示する2枚法（中園，1996）と、通常法を前提とせず「根っこを含めて一本の実のなる木を描いて下さい」との指示する1枚法（中園，2000a）がある。この変法に関しては、これまで描かれた根への連想語の検討から根の描画が通常法から得られる情報を補完することが示され（中園，1996）、形態の分類法とバウムが象徴する身体的側面（中園，2000a）や、内観法による効果測定（中園，2000b）の研究がなされている。

また中園（2001，2002）は、アイデンティティと身体器官に注目し、「今度は天に根をはった、すなわち、逆さまの、1本の実のなる木をなるべ

く丁寧に描いて下さい」と教示する変法を考案した。その後、中園（2003）は、円形の枠を付けた画用紙に「これから二本の実のなる木を描いてもらいます。画用紙の中央から左右に横に伸びている木です。左側にのびる木は悪い木です。右側にのびる木は善い木です。できるだけ丁寧に描いて下さい」と教示する変法も考案している。彼はこれらの変法を順に、直立画、倒立画、横立画と名付け、これら3つの変法を用いる3枚法も提案した（中園，2005）。

中園の理論は精神分析、特にErikson, E. H. の考えを日本的意識の中で読み込み、それをバウム理解に統合した特徴的な試みである。しかし、彼以外この変法を用いた報告はなく、これら変法が普及しているとは言い難い。今後は、他の研究者が中園の変法と理論を批判的に検討していくことが求められよう。

6. 未来の木

河合・名島（2008）は、“自分の未来が見えず漠然としたものを抱えながら過ごしている学生に、自分の未来に何か少しでも希望を見出して前を見てほしいという願い”から「未来の木」を考案した。これは通常法の後に、「では、この木の未来を描いてください」と教示し、もう1枚バウム描画を求め、「木は、あなた自身を表すといわれています」と描き手に伝えた後で、描かれた2つのバウムの「未来」に関する質問を行う。

治療技法として考案された点がこの変法の特徴である（河合・名島，2009）。しかし、2編の報告があるのみで、基礎研究は行われていない。考案者らは数量的な基礎研究に消極的であるが、「未来の木」という刺激がバウムの描画体験とバウム形態にどのような影響を及ぼすかを検討することは、今後、最低限必要であるように思われる。

7. 想像の木

工藤（2009）は、描き手の創造的表現を重視して「想像の木」を考案した。これは通常法の後で、「心のなかに浮かんでくる空想（想像）の木を描いてみましょう。現実にあるような木で

はなくて、想像した木ならどんなものでもかまいません」と教示し、その後、付加物を足すことも促し、彩色してもらおう変法である（彩色の導入については、描画条件操作法で改めて論じる）。

この「想像」は、描き手のイメージーションだけでなく、検査者（見守り手）のイメージーションをも重要視するという点で、二重の意味がある。ユング派分析家である老松（2007, 2009）は、得られた描画を素材に検査者がアクティブ・イメージーションを行うことの有用性を指摘しているが、「想像の木」では描き手と検査者の両者が創造的な過程を歩むことが期待されるといえる。しかし、「未来の木」と同様、基礎的研究はなく、さらなる検討が求められている。

8. カミの宿る樹

塚崎（1993）は、マンダラ様図形への彩色と同様の効果をバウムテストに求め、「カミの宿る樹」を考案した。これは通常法の後、「人里離れた深い森の奥に、カミさまの宿る樹があります。その絵を描いてください」と教示し、もう1枚バウム描画を求める変法である。

質的な検討から、この変法では描き手の“超越性と結びついたときの体験をかいまみることができ”、“深い統合力のようなものが刺激され”、バウムの形態水準が向上するとしている。しかし、この変法に関する報告は1編のみで、有用性は示されていない。筆者らは、この変法が描き手の自我肥大体験を惹起させる（良くも悪くも）、との印象を持つ。

9. 桜の木 (Baum-C)

後藤（1975）は統合失調症者が簡素なバウムを描くことと、描く木が「なんでもよい」と言われるとかえって困ると訴えるクライアントと出会い、描く対象を“一定に統制することで、テストとしての側面が強調され”、描き手に負担となる変数を減らす「桜の木」を考案した。これは通常法の後で、誰もが見た経験がある「桜の木」を描くよう求める変法である。後藤はこれを「Baum-C」と名付けた。

この変法の特徴を後藤は、“自由を許されたときに豊かな表現ができるのか、表現困難、表現不能に陥りやすいのか、また表現できても崩れてしまうのかという問題と、課題を与えられた方がよりよく自分を表現しやすいのか、おざなりの反応しか示さないのか、自由を許された時と同じなのか、より個人としてのまとまりがつきやすいのか等についての知見が得られる”と述べている。上述した「未来の木」や「想像の木」、「カミの宿る樹」と比して自由度が下がるが、概念レベルで描き手を保護するという特徴をこの変法は持つ。しかし、後藤による報告しかなされておらず、それも経験的な指摘に留まるため、さらなる検討を必要とする。

10. 集団樹木育成描画

芦高（1995）が、異なる年齢の集団において各々が人間関係について発見的な体験をすることを期待して考案したのが、「集団樹木育成描画」である。これは数人で構成されたグループに所属する者に対して、そのグループ皆が「実のなる木を育てている絵」を描くよう求める方法である。木の種類や本数に制限はなく、「自分だけではなく、班（グループ）の友達をできるだけ思い出して書いて下さい」とする。

この変法は、動的な樹木画法+人物画法と考えることができる。報告は1編のみで、治療的な側面は十分論じられていないため、これもさらなる検討を要す変法である。

11. 感情に刺激を与える変法

古池（2008）は、子どもの描画への感情表現を検討するために、「うれしそうな木」「悲しそうな木」「怒っているみたいな木」を描くよう求め、その結果を検討している。これはSchleibe（1934）が「死んだ木、凍ってる木、幸福な木、おびえている木、悲しい木、死につつある木」の6種類の木を分析したもの（阿部、2005）と類似した方法である。

これは、描き手の感情面を言語で刺激し、感情を備えた（擬人的な）バウム表現を求める方法である。しかし、バウム形態の検討は十分ではなく、発達的な知見は得られているが、治療

的な知見は指摘されていない。

12. 植えたい木

青木 (1988) はバウムテストの信頼性を検討する研究の中で、教示の変化によりバウムがどのように変化するか、バウムの安定性はどの程度あるかを検討した。そこでは通常法の後に、「広い庭があります。そこに木を1本植えるとしたらどんな木が良いですか。あなたが植えたいと思うような木を1本描いて下さい」と教示し、もう1枚バウムを描くよう求めている。

これは変法の考案を目的としたものではない。この報告はバウムテストの基礎研究として行われたものであり、教示を変化させても、バウムはある程度の安定性を示し、再検査信頼性が確認された、と結論づけられている。

13. その他

バウムイメージを操作する変法は、筆者らが調べた限り、わが国ではこれ以上報告されていない。

しかし、Koch (1957/2010) はテキストの中でHengelの「通常のバウム、空想のバウム、夢のバウム」について言及している (邦訳書147頁)。またSchweiz von Widrigの「普通でないバウム」やUbbikとArnhemの「語りかけるバウム」にも触れている。筆者らが概観した変法と類似する点もあるが、これらも今後、検討が望まれる変法かもしれない。

IV 描画条件操作法

1. 枠づけ法の導入

中井 (中井, 1970; 1974) は、河合隼雄の箱庭療法に関する講演から着想を得て、「枠づけ法」を提案した。彼は、枠づけされた空間には“内面的、隠された欲求や志向、攻撃性、幻想、内実”が、枠がない空間には“外面的、防衛的、虚栄的、現実的”な表現がなされるとし、枠は保護し開放させるだけでなく、心的表出を制限し拘束するという両義的な特徴を有することを指摘した。この枠づけ法はその後、風景構成法 (中井, 1970) やHTP法 (細木・中井・大森・高橋, 1975) などに導入されている。

後藤 (1975) はバウムテストに枠づけ法を導入し、この変法を「Baum-W」と名付けた。そして枠によって“病的な側面、例えば、間違っただ同一視のみられる「妄想の木」とでも名付けられる側面の表現が可能となった”と述べている。その後、数量的な検討から、大学生に枠をつけた場合、幹の模様や陰影や傷と切断された枝が出現しやすくなり、用紙からはみ出すバウムは少なくなることが示されたが (森谷, 1983)、臨床群を対象とした場合、形態の差はないとの報告もある (泉・志村, 1985)。また、通常の枠の中にさらに円形の枠を加えた「丸枠づけ法」で行った場合、一線枝と線描樹冠 (形はなんであれ、一本線で囲まれた樹冠)、地平線が出現しやすくなり、バウム自体のサイズは縮小し、用紙からはみ出しは減り、ヤシ型のバウムが多くなることが明らかとなっている (森谷, 1983)。質的な検討から、枠づけ法と丸枠づけ法を行うことはバウムの形態水準を上昇させ、表現を豊かにすること (山下, 1983; 森谷・森・大原, 1984)、枠づけが治療的に働くことも指摘されている (森谷, 1983; 山下, 1983; 森谷・森・大原, 1984; 小山内・酒木・原岡ほか, 1989)。その他にも、終末期癌患者の心理的特徴を把握する研究 (會田, 2005)、他の変法に関する研究 (中園, 2000a, 2000b, 2003)、理学療法的リハビリテーション (二ノ宮・櫻井・岐部ほか, 2004) や集団療法 (野島, 2010) の効果測定の研究など、この変法を用いた研究は多数報告されている。

バウムテストで枠づけする意義は、最初の中井の指摘に集約されているため、これ以上の説明は不必要であろう。この変法はこれまで丁寧な研究がなされてきた。そのため今後は、事例研究がさらに報告され、心理臨床学における「枠」の問題と対比しつつ、論が展開されることが期待される。

2. 彩色 (色彩) の導入

人間にとって色は大きな意味を持つ。同じ投影法に分類されるロールシャッハ法では、色は情緒 (情動) と関連があるとされ、解釈仮説の根幹の一部を担っている。Kochも言及したよう

に、彩色（色彩）を導入する変法も存在する。Bolander（1977/1999）はバウムテストに彩色（色彩）を導入することの有用性に言及しており、HTP法でも彩色（色彩）を導入することが精神病理の診断や予後を理解する上で有用であるとの報告がある（Hammer, 1958）。この変法は、さらに2つに分類することができる。

A. 彩色の段階を加えた方法

サインペンでバウムを素描した後に、クレヨンで彩色を求める変法である。横田（2008）はこれを「彩色樹木画」と名付けている。

この変法に関する最初の報告は中井（1985）の論稿であり、バウムテストに早くから彩色の段階を加えていたと述べている。論稿内で彼は、“破瓜型ないし非妄想型の患者に「風景構成法」を行った場合、一見穏やかな風景であるものが、彩色の段階になってそれが荒涼たる冬枯れの風景、荒地の風景であることがはしなくも露呈して私を瞠目させ”るが、バウムテストでも同様のことが生じると報告した^{註3)}。また“時に回復過程で緑と枯れ葉の色とが交替して、回復期にこきざみな揺れをもたらしたこともあった”とも述べている。中井の下で学んだ角野（2004a, 2004b, 2005, 2009）も“心的エネルギー量や感情レベルと状況などを知る手がかりとなり、情報量も豊かになる”として、彩色の段階を設け、臨床実践に用いている。これらの指摘は、臨床実践から得られた感触、すなわち質的な検討から得られた知見であるが、SD法による数量的な研究（横田・伊藤・清水, 1999a）からは、この変法がバウムの統合度（形態水準）を高める場合と、障害の特徴をより露わにする場合があることが報告されている。その他は、他の変法に関する研究や（工藤, 2009）、統合失調症者の陰性症状（横田・伊藤・清水, 1999b）、経過（横田, 2003, 2004；青木・横田, 2005）、予後（横田・伊藤・青木, 2005）、改善や増悪（横田, 2008）の研究で用いられている。

この変法を中井と角野は治療技法として、横田らは心理アセスメントとして用いている傾向がある。数量的な検討は行われているが、それはSD法で形態の印象を評価したものにとどまる。

素描の段階のバウムはこれまでの通常法の知見を、彩色の段階のバウムは風景構成法の知見を援用して理解を試みることも可能かもしれないが、今後はバウム形態を通常法と比較する基礎研究が求められる。

B. 色彩のみで描く方法

素描の段階を設けず、色彩のみでバウムを描く変法もある。Fodor・Kendel（1966）は、鉛筆で実のなる木を描いた後に、6色の色鉛筆（赤・青・緑・黄・茶・紫）で実のなる木を描くよう求める「色彩バウムテスト」を考案した。1974年にこれをわが国に導入した名島らは、色を12色（赤・青・緑・黄緑・黄・茶・紫・橙・桃色・水色・白・黒）に増やし、最初に鉛筆でバウムを描いてもらい（黒色バウム）、その後色鉛筆で描いてもらう（色彩バウム）方法に変更した（名島・増田, 1993）。

色彩バウムは、大きさ、バランス、豊かさ（退行所見の有無）、形態の変化を黒色バウムと比較しつつ解釈していく（名島, 1996）。さらに色彩バウムの理解は色の使用数、色の使い方にも注目する。黒色バウムと色彩バウムに、順序効果は影響せず、どちらを先に用いても良い（村田・村田・名島, 2001）。数量的な検討により、「メビウスの木」（山中, 1976）は統合失調症者の黒色バウムで14%、色彩バウムで8%認められることが示されている（名島, 2004）。また、色を非臨床群は平均4.3色、統合失調症者群は平均3.6色使い、両群ともに茶（幹と枝に）、緑（葉に）、橙（実に）がよく使われること、色の不自然な使用（逸脱色）は現実検討能力と関連があり、その表現は統合失調症者に多く認められることが報告されている（名島・増田, 1993）。色の使用数については、非臨床群で平均5.0色、統合失調症者群で平均2.8色との報告もある（名島・原田・横田ほか, 2001）。発達との関連においては、6歳児は平均4.3色使い、学年をあがることに平均値は上昇し、10歳児は平均6.6色を用いるが、その後は平均値が下がり、14・15歳では4～5色の色を用いること、その後の平均値は10歳代後半で4.9色、20歳代前半で4.7色、20歳代後半で4.3色、30歳代で4.9色、40歳代で4.5色、

50歳代で4.7色となる(名島, 2004)。質的な検討では, 色彩バウムの「黒色」は抑うつ指標となると指摘されている(名島, 1998)。その他には, セルフ・エスティーム(村田, 2002), 幼児期の仲間関係(道廣・玉木, 2009), 子どもの問題行動(道廣・玉木・日下部, 2010)の研究で用いられている。

この変法は, 数量的な検討は行われているが, それらの知見は学術論文として刊行されておらず, 卒業論文などの知見を名島が論稿の中で触れているだけである。したがって, 調査手順やデータの信頼性を明らかとするためにも, それらの研究が正式に公表されることが望まれる。また, バウム形態を「バウムの豊かさ」などの抽象的な指標で検討している報告が多く, 実際に報告を読む者にとって, どのようなバウムであったかがイメージし難いなど, 研究の方法論上の問題もいくつか認められた。

上のように, 黒色バウムと連続して行うのではなく, クレヨンを用いた変法もある。これを最初に報告したのは岩井・金盛・渡辺ほか(1980)である。この変法を精力的に用いている水口(2002)は, “がん起因する激しい痛みに対して確実な鎮痛対策を行うには心理面からの対応が重要である”と考え, 1983年頃にこの変法を導入した。彼が関わった事例は『最後の樹木画』(水口, 2002)にカラーで掲載されており, 迫力をもって事例が報告されている。クレヨンを用いた理由としては, “末期癌患者にとって描きやすく, かつ親しみやすく, 描くことによって子どもの頃を思い出して精神的開放が得られるのではないか”(水口・蝶間林, 2000)と考えたためであるという。この変法を用いた研究としては, 末期癌患者の心理を明らかにしようとした研究(水口・蝶間林, 2000)があり, 野々口(2001)の啓発的なバウムテスト紹介や, 名張・名張(2009)の一般書籍^{註4)}で類似の方法が採用されている。

こちらの変法は基礎研究がまったくないため, クレヨンがバウム描画にどのような体験的变化を生じさせるかなどは明らかになっていない。今後詳しい検討が行われるべきであろう。筆者らは, クレヨンがほどよい描きにくさという特

徴を備えており, 用紙に接した際に描き手が感じる柔らかさが幾分退行的に働くだらう, と考えている。ただし, この変法が緩和ケア臨床という独特の場で威力を発揮しており, その他の対象者や場面でどのように働くかは, 今後の検討を待たねばならない。

3. バウムの模写 (Baum-S)

後藤(1975)は, 臨床経験と藤岡喜愛のコメントから, 大人で柱状の幹と丸い樹冠の(冠型の)バウムを描けない者は, どこかに障害があるだろうとし, バウムの模写を考案した。後藤はこれを「Baum-S」と名付けている。

後藤は, この変法が描き手の知覚の特徴を捉えることができるとし, ベンダー・ゲシュタルト・テストと通常法との中間に位置すると考えた。しかし後藤以外にこの変法を採用した報告はなく, 特徴は明らかとなっていない。今後は, 「良い」形のバウムを描かせることが検査者の目的とならないよう注意しつつ, 基礎研究から始める必要がある。

V 通常法の臨床的・拡大的活用

以上, バウムイメージ操作法と描画条件操作法とに大別して, バウムテスト変法を論じてきた。しかし, 上の二つに分類できない変法もある。教示も物理的条件も変更していないため, 厳密には変法とは言えず, 通常法の臨床的活用, または拡大的活用と言った方がよいかもしいものである。これらはバウムテスト研究において極めて重要な位置にあると考えられるため, 本稿では仮に「バウム療法」と名付け, その領域について論じておきたい。

ところで鶴田(2005)は, これまでのバウムテスト研究を, 査定を目的として用いる「検査的」, 査定だけでなく心理的な関わりとしても用いる「方法的」, 査定のみならず描画の体験や創造的な側面にも考慮して用いる「技法的」との3つに分類している。この分類は, バウムテスト実践者(研究者)のスタンスに影響を受けるため, 明確に分類できない部分もあるが, 「技法的」は「検査的」と「方法的」を内包しているという特徴を持つ(図)。この分類法からすれば, 上

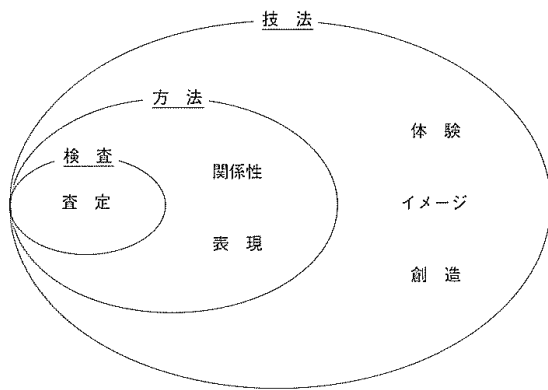


図 研究の分類図（鶴田，2005より）

述した変法の多くは、「検査的」な領域に重きをおいた変法かもしれない（各所で変法の治療的側面に言及したように、すべてではないが）。以下に、わが国で報告された「方法的」「技法的」と理解できるいくつかの研究を概観する。

1. バウムを素材に対話を広げる

藤中（1996）はクライアントが描いたバウムを題材に、セラピストとクライアントが話し合う心理面接技法を報告した。この方法では、「絵のどの部分について話し合うか」「どんなことについて話し合うか」「どのような態度で話し合うか」が重要となってくる。さらに藤中（2008，2010）は、“描画行動と日常行動を関連させるためには、どのような工夫が必要か”という問題意識から自身の活用法を発展させ、“自らの描画行動を振り返り、樹木画作成中に体験していたであろうことを振り返りの面接で再体験し、それを言語的に明確にしていく”方法を考案した。具体的には、描き手に対してバウムの連想を尋ね、それら連想語をPAC分析でクラスターに分け、そのクラスターをクライアントとセラピストとが話し合う、というものである。

これは鶴田でいう「方法的」な研究といえるかもしれない。藤中と同様のことは、すでに高橋（2007）が「描画後の対話（Post Drawing Dialogue；PDD）」として重要視している。しかし、藤中の活用法はバウムという実体を面接場面で扱いつつ、その関連で治療を進める方法を事例研究で論じた点で、評価されるべきであ

ろう。今後は、限界と禁忌などが論じられるべきかもしれない。

2. 心理面接とバウムテストを不可分のものとして扱う

Kochのバウム論を再検討した岸本（2005）は、鶴田の分類でいう「技法的」な研究を進めている研究者と考えることができる。岸本（2007）は「表現」を心理療法のキータームとして取り上げた山中（1999）を参考に、数量的で査定的な知見をも顧慮しつつ（岸本，2008b）、バウムテストを描き手の内的表現の「留め金」として（岸本，2007）、創造的な表現として論じている。岸本（2008a）は心理療法においてバウムテストを行う意味を論じている。これを筆者らは、心理療法としてのバウムテストを描画結果と心理面接とに分けて考えるのではなく、両者を渾然一体としたもの、表裏の関係にある「ひとつのまとまり」のようなものとして扱うスタンス、と理解している。この点に関して成田（2007）は、“バウムはそれ自体がコミュニケーションのためのコミュニケーション、つまり、メタ・コミュニケーションの地平として機能する性質を持っている。ところが同時に、そこには投影法的な心的内容（意味）がふくまれているので、その他のメタ・コミュニケーションによって解読されるべき暗号文としての性質も有している”と論じているように、心理療法のプロセスにおいて、バウムテストは新たな位相を開かせると考えることができる（岸本，2008b）。

これは二元論的理解に囚われないバウムテストの活用法と換言できるかもしれない。このようなスタンスからバウムテストを研究した報告はわずかで（例えば、多田，2008；成田，2009）、今後注目される研究テーマとスタンスであろう。

VI 展望

1. 変法の諸問題

バウムテストの変法は多種報告されている。しかし、それぞれの変法が十分議論されているとは言い難い。これには、バウムテスト研究全般に存在する指標や方法論の問題（佐渡，坂本，伊藤，2010；佐渡，2010）も関係しているが、

本稿での検討から以下の問題が考えられた。

- ① 特定の研究者らが特定の変法を採用して研究しており、発展的・批判的な検討が行われていない。すなわち、変法がその考案者らのみの聖域となってしまう傾向が認められ、他の研究者による追試や再検討がなされていない。
- ② 通常法と連続して行うにも関わらず、通常法との相違点と類似点が明らかになっていない変法が多い。
- ③ 考案されたままで検討が行われていない変法がいくつかある。

本稿の冒頭で少し触れたが、変法は心理臨床家の工夫によって生み出される。したがって、各変法は考案者の臨床観と分けて考えることができない。しかし、それが1つの変法として成り立つためには、その変法の特徴が「個の知」を超えたレベルでも記述されるべきである（その点で風景構成法は1つのモデルである）。そのためには、通常法だけでなく他の変法との対比の下で、各変法の独自性が論じられる必要がある。

2. 今後求められる研究

上述した諸変法だけでなく、教示や物理的条件の変化を検討することは、バウムテスト全般の知見を深めることに寄与する。

「バウムイメージ操作法」については、まず基礎研究が丁寧に行われるべきである。既に何人かの変法考案者が指摘しているように、基礎研究はその後、変法の有用性（特に治療的側面を）を減じる可能性があるため、十分な配慮をもって行う必要がある。順序としては、事例研究から基礎研究に移り、その後、両アプローチが相補的に行われることが最も現実的かもしれない。さらに、通常法の教示も今一度検討されるべきである。

「描画条件操作法」については、今後、大きな可能性があるように思われる。彩色（色彩）を導入する変法は、バウムテストにおける色の意味を、他技法との比較から論じる必要がある。

さらに、筆者らが邦文献をレビューしたところ、画用紙の大きさはA4版からA5版が用いられており、必ずしも用紙は縦長の向きで配布されていないようである。したがって、画用紙の大きさや向き（表現する空間）がバウム描画に及ぼす影響も検討されるべきかもしれない。また、バウムがどのような関係性や場面から描かれたかも研究されるべきである。筆者らは個別法と集団法とのバウムテスト結果を比較しているが（佐渡・坂本・岸本, 2010; 佐渡・坂本・田中ほか, 2010）、それだけではなく描画場面の検査者の有無、心理的・身体的ストレス下の描画など、検討が望まれながらも未だ手の付けられていない要因は多い。

「バウム療法」については、待望のKochの原著第三版が翻訳されたことで、新たな出立を迎えたといえる。バウムテストはわが国に導入されて約半世紀が経ち、多くの知見が集積されてきた。しかし、その研究の多くはバウムの描画結果に注目したものがほとんどであり、本当の意味で臨床に還元できるものであるかは疑わしい。今後、治療論に立つ研究を行うためには、藤中のようにバウム後の対話に焦点を当てたものや、バウムの描画過程に注目したものだけでなく、岸本らのように心理療法という枠組みの中でもバウムテストを論じていく必要がある。その方法論としては、心理臨床家がこれまで重要視してきた事例研究、そして近年高い注目を浴びている質的研究が、今のところ適当であるかもしれない。そこで得られた仮説が数量化して論じるまで洗練された時、数量的な検討に移ることが望まれる。

上述した諸課題を研究していくためにも、これまでのわが国の研究知見を再検討し、問題や課題をさらに明確にする必要がある。また、諸外国の研究知見はより積極的に取り入れるべきである。基準の作成を得意とし、諸要因を細分化して検討することを好む米国の研究に学ぶ点は大いにあろう。さらに、Stora (1994) の『樹木画テスト』やWaser (2000) の『三本の木』は邦訳が待たれる書籍である。

註釈

- 1) 中島が児童臨床の分野でバウムテストを活用してきたことを踏まえると、子どもは「1本」と限定しないと複数本のバウムを描くことが多いのかもしれない。
- 2) この部分は『バウムテスト, 第3版』(Koch, 1957/2010)には記されていない。
- 3) 中井はサインペンとクレヨンを用いているとは記していない。また中井と角野が、クレヨンを用いているのか定かではない報告もあるが、両人が風景構成法の実践者であることを踏まえると、サインペンとクレヨンを用いていると考えて、間違いないであろう。
- 4) これらは24色以上のクーピーを用いるとしている。色鉛筆による描画と分けるために、本稿では便宜上、水口らと同様の方法とした。

文献

- 1) 阿部恵一郎 (2002) 解題. Castilla, D. de (著) 阿部恵一郎 (訳), バウムテスト活用マニュアル — 精神症状と問題行動の評価. 金剛出版. pp. 224-231.
- 2) 阿部恵一郎 (2004) バウムテスト. 明治安田こころの健康財団 (編), 投映法の見方・考え方. 明治安田こころの健康財団. pp. 31-59.
- 3) 阿部恵一郎 (2005) 解題 樹木画テスト (あるいはバウムテスト) の研究史. Fernandez, L. (著) 阿部恵一郎 (訳), 樹木画テストの読みかた — 性格理解と解釈. 金剛出版. pp. 115-145.
- 4) 會田秀子 (2005) がん末期患者に対するバウムテストの試み. 生と死, 7, 23-35.
- 5) 青木英美・横田正夫 (2005) 統合失調症患者の彩色描画の改善の流れと改善指標 — 5年間の経過追跡から. 平成14-16年度文部科学省科学研究費補助金 (研究代表者; 横田正夫基盤研究 (C) (2) 課題番号14510163) 精神分裂病の予後予測指標の臨床心理学的研究 研究成果報告書. pp. 32-60.
- 6) 青木健次 (1977) バウム・テストにおけるバウム・イメージの多様性を測る. 心理測定ジャーナル, 13 (1), 19-23.
- 7) 青木健次 (1980) バウムテストの臨床的活用 — 新実施方法による新たな知見を加えて. 京都大学学生懇話室紀要, 10, 59-81.
- 8) 青木健次 (1982) 投影描画法の基礎的研究 (第2報) — 態度統制実験. 京都大学学生懇話室紀要, 12, 55-74.
- 9) 青木健次 (1984) バウム・イメージの多様性と人格 — 分裂病者の特徴とその表現心理学的理解. 京都大学学生懇話室紀要, 13, 21-36.
- 10) 青木修 (1988) バウムテストの安定性に関する検討. 心理測定ジャーナル, 24 (5), 15-20.
- 11) 芦高浩一 (1995) 描画法からみた異年齢集団理解へのこころみ — 集団樹木育成描画を通して. 鳴門生徒指導研究, 5, 17-30.
- 12) Bolander, K (1977) *Assessing personality through tree drawing*. Basic Books Inc, New York. [高橋依子 (訳) (1999) 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版.]
- 13) Castilla, D. de (1994) *Le test de l'arbre: Relation humaines et problèmes actuels*. Masson, Paris. [阿部恵一郎 (訳) (2002) バウムテスト活用マニュアル — 精神症状と問題行動の評価. 金剛出版.]
- 14) Fodor, Von S., Kendel, K. (1966) Vergleichende Beobachtungen von schwarzen und farbigen Baumzeichnungen bei psychotischen Patienten. *Schweizer Archiv für Neurologie, Neurochirurgie und Psychiatrie*. 97 (2), 361-386.
- 15) 藤中隆久 (1996) バウムテストにおける人間関係の効果の実証的研究. 心理臨床学研究, 14 (2), 163-172.
- 16) 藤中隆久 (2008) バウムテストを使用した二つの事例研究. 心理床学研究, 26 (2), 184-192.
- 17) 藤中隆久: バウムテストを利用して自己理解のための体験探索を促進する方法. 心理臨床学研究, 28 (3), 303-312.
- 18) 後藤佳珠 (1975) 臨床場面に適用した “Baum Test” (I) — 新しい技法 “Baum-C” “Baum-S” を加えて. 芸術療法, 6, 53-59.
- 19) Hammer, E. F. (1958) The chromatic H-T-P, a deeper personality-tapping technique. Hammer, E. F. (ed.), *The clinical application of projective drawings*. Charles C Thomas Publisher, Illinois. pp. 208-235.
- 20) 林勝造 (1973) バウムテスト. 小嶋謙四郎・秋山誠一郎・空井健三 (編), 小児の臨床心理検査法. 医学書院. pp. 222-240.
- 21) 細木照敏・中井久夫・大森淑子・高橋直美 (1971) 多面的HTP法の試み. 芸術療法, 3, 61-67. [中井久夫 (1984) 中井久夫著作集, 別巻2 — 中井久夫共著論文集精神 医学の臨床. 岩崎学術出版社. pp. 247-258. 所収]
- 22) 一谷彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子 (1985) バウムテストの基礎的研究 (I) — いわ

- ゆる「2枚実画法」の検討. 京都教育大学紀要Ser. A, 67, 17-30.
- 23) 岩井寛・金盛浦子・渡辺勉・藤田雅子・田久保栄治・蔦政和 (1980) 幼児・児童の発達過程に関する「樹の描画」の検討. 芸術療法, 11, 25-37.
- 24) 泉澄子・志村実生 (1985) 精神障害者のバウム・テスト2枚法にみられる形態変化. 九州神経精神医学, 31 (2), 185-191.
- 25) 角野善宏 (2004a) イメージを描く技法 —第1節 バウム・テスト. 皆藤章 (編), 臨床心理学全書 7—臨床心理査定技法2. 誠信書房. pp. 181-187.
- 26) 角野善宏 (2004b) 樹木画. 描画療法から見たところの世界 —統合失調症の事例を中心に. 日本評論社. pp. 173-195.
- 27) 角野善宏 (2005) 病院臨床におけるバウム技法. 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編), バウムの心理臨床 —京大心理臨床シリーズ1. 創元社. pp. 338-350.
- 28) 角野善宏 (2009) 風景構成法と樹木画法. 皆藤章 (編), 現代のエスプリ505, 風景構成法の臨床. ぎょうせい. pp. 129-142.
- 29) 河合可南子・名島潤慈 (2008) 「未来の木」の特徴と意義. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 167-176.
- 30) 河合可南子・名島潤慈 (2009) バウム研究における「未来の木」の位置づけ. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 27, 99-104.
- 31) 岸本寛史 (2005) 『バウムテスト第三版』におけるコッホの精神. 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編): バウムの心理臨床 —京大心理臨床シリーズ1. 創元社. pp. 31-54.
- 32) 岸本寛史 (2007) 表現としての描画. 臨床心理学, 7 (2), 151-157.
- 33) 岸本寛史 (2008a) なぜバウムテストをするのか. 堺・南大阪地域活性化のための拠点としての心理臨床センター報告書. pp. 4-14.
- 34) 岸本寛史 (2008b) 投映法とナラティブ. ロールシャッハ法研究, 12, 51-58.
- 35) 岸本寛史 (2010) バウムテスト. 小野けい子・佐藤仁美 (編著), 心理療法とイメージ. 財団法人放送大学教育振興会. pp. 81-90.
- 36) Koch, C (1952) *The tree test: the tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis*. Hans Huber, Bern. [林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) (1970) バウムテスト —樹木画による人格診断法. 日本文化科学社.]
- 37) Koch, K. (1957) *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3. Auflage. Hans Huber, Bern. [岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010) バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.]
- 38) 古池若葉: 幼児期の樹木画における感情表現の発達 —5歳から6歳にかけての縦断データの検討. 跡見学園女子大学文学部紀要, 41, 105-128.
- 39) 小山内實・酒木保・原岡陽一・小野正宏・塚本隆三・村木彰 (1989) 枠づけ法における「枠」の意味 —枠の原義とその治療的転導. 日本芸術療法学会誌, 20, 7-13.
- 40) 工藤昌考 (2009) 解説にかえて —臨床場面における「樹木」に関するイマジネーション (その錬金術的側面がもたらす意義と「想像の木」法施行の覚え書き). Jung, C. G. (著) 老松克博 (監訳) 工藤昌考 (訳), 哲学の木. 創元社. pp. 215-277.
- 41) 国吉政一・小池清廉・津田舜甫・篠原大典 (1962) バウムテスト (Koch) の研究 (1) —発達段階における児童 (正常児と精薄児) の樹木画の変遷. 児童精神医学とその近接領域, 3 (4), 47-56.
- 42) 国吉政一 (1970) 補遺 —日本におけるバウム・テストの研究. Koch, K. (著) 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳), バウム・テスト —樹木画による人格診断法. 日本文化科学社. pp. 110-150.
- 43) 桑原尚佐・前田亨・重本淳一・平谷文子・盛山文雄・加治清・古田島匠・宮原育子・大島元子・盛山和子・小林睦 (2003) 少年事件における心理アセスメント —「夢の木法」を中心として. 最高裁判所家庭裁判所調査官研修所 調研紀要, 77, 1-31.
- 44) 松岡舞 (2008) 樹木画テストにおける「擬人的な木」に関する研究. 創価大学大学院紀要, 30, 359-384.
- 45) 道廣倫子・玉木健弘 (2009) 幼児期の仲間関係と色彩バウムテストの関係性. 福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 79-86.
- 46) 道廣倫子・玉木健弘・日下部典子 (2010) 幼児期における色彩バウムテストとCBCLの関係. 福山大学こころの相談室紀要, 4, 75-82.
- 47) 三船直子・倉戸ヨシヤ (1992) バウムテスト2回施行法 (試論 I) —基礎的調査資料. 大阪市立大学生活科学部紀要, 40, 313-327.
- 48) 水口公信・蝶間林一美 (2000) 末期癌患者の樹木画に関する研究. 心身医学, 40 (6), 455-463.

- 49) 水口公信 (2002) 最後の樹木画 —ホスピスケアにおける絵画療法. 三輪書店.
- 50) 森谷寛之 (1983) 枠づけ効果に関する実験的研究 —バウム・テストを利用して. 教育心理学研究, 31 (1), 53-58.
- 51) 森谷寛之・森省二・大原貢 (1984) バウム・テストにおける枠づけ効果 —症例研究. 心理臨床学研究, 1 (2), 73-81.
- 52) 村田敏晴・村田陽子・名島潤慈 (2001) 黒色バウムと色彩バウムの比較 —描画の順序効果とバウム内容の検討. 山口大学心理臨床研究, 1, 23-27.
- 53) 村田陽子 (2002) セルフ・エスティームと黒-色彩バウムテストとの関連性. 山口大学心理臨床研究, 2, 89-97.
- 54) 名張淑子・名張恵那 (2009) 子どもの絵でわかる! できる! マナ式描画の心理解析法 —Vol. 2 樹木画・まる画編. 明窓出版.
- 55) 名島潤慈・増田勝幸 (1993) バウム・テスト. 上里一郎 (編), 心理アセスメントハンドブック. 西村書店. pp. 223-238.
- 56) 名島潤慈 (1996) 黒-色彩バウム二枚法の意義. 熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 45, 271-281.
- 57) 名島潤慈 (1998) 色彩バウムテストと抑うつ状態との関連性. 熊本大学教育実践研究, 15, 1-5.
- 58) 名島潤慈 (1999) 黒-色彩バウムテストの解釈. 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 59) 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子 (2001) バウムテスト. 上里一郎 (監), 心理アセスメントハンドブック, 第2版. 西村書店. pp. 186-197.
- 60) 名島潤慈 (2004) 心理アセスメントにおける黒-色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢 (1). 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 143-156.
- 61) 中井久夫 (1970) 精神分裂病者の精神療法における描画の使用 —とくに技法の開発によって作られた知見について. 芸術療法, 2, 77-90. [中井久夫 (1984) 中井久夫著作集 精神医学の経験, 1巻 —分裂病. 岩崎学術出版社. pp. 17-45. 所収.]
- 62) 中井久夫 (1974) 枠づけ法覚え書. 芸術療法, 5, 15-19. [中井久夫 (1985) 中井久夫著作集 精神医学の経験, 2巻 —治療. 岩崎学術出版社. pp. 192-203. 所収.]
- 63) 中井久夫 (1985) バウム・テストの普遍性へのささやかなる懐疑. 芸術療法, 16, 63-64. [中井久夫 (1991) 中井久夫著作集4巻 精神医学の経験 —治療と治療関係. 岩崎学術出版社. pp. 241-245. 所収.]
- 64) 中島ナオミ (2002) わが国におけるバウムテストの教示. 臨床描画研究, 17, 177-189.
- 65) 中園正身 (1996) 一変法としての樹木画法の研究 —根を強調した教示法の導入について. 心理臨床学研究, 14 (2), 197-206.
- 66) 中園正身 (2000a) 樹木画法の解釈論について —樹木心理学の視点から. 文教大学人間科学部人間科学研究, 22, 1-12.
- 67) 中園正身 (2000b) 樹木画法の研究 —樹木心理学の視点から. 文教大学臨床相談研究所紀要, 4, 31-41.
- 68) 中園正身 (2001) 樹木画法の研究 (Ⅲ). 文教大学人間科学部人間科学研究, 23, 77-84.
- 69) 中園正身 (2002) 樹木画法の研究 (Ⅳ). 駒沢女子大学研究紀要, 9, 211-217.
- 70) 中園正身 (2003) 樹木画法の研究 (Ⅵ). 駒沢女子大学研究紀要, 10, 243-249.
- 71) 中園正身 (2005) 樹木心理学の提唱と樹木画法への適用. 北樹出版.
- 72) 成田慶一 (2007) 試論 —バウムというコミュニケーション. 大阪大学大学院人間科学研究科 心理教育相談室紀要, 13, 156-162.
- 73) 成田慶一 (2009) 脳梗塞を発症した中年男性の急性期病棟における心理援助 —医療と心理臨床をむすぶ複合的視点. 心理臨床学研究, 27 (3), 312-322.
- 74) 二ノ宮恵美・櫻井真・岐部隆明・岸本周作・佐藤孝臣・井野邊純一 (2004) パワーリハビリテーションにおける心理的側面の変化 —心理検査による評価を通して. 大分県リハビリテーション医学会誌, 2, 20-22.
- 75) 野島一彦 (2010) 統合失調症者のグループの効果判定. 集団精神療法, 26 (1), 39-44.
- 76) 野々口純代 (2001) 看護に役立つカラー深層心理学. ナースビーンズ, 3 (12), 1065-1087.
- 77) 老松克博 (2007) 描画にはイメージーション! 臨床心理学, 7 (2), 216-217.
- 78) 老松克博 (2009) 木, 錬金術, アクティブ・イメージーション —監訳者による序. Jung. C. G. (著) 老松克博 (監訳) 工藤昌考 (訳), 哲学の木. 創元社. pp. 3-15.
- 79) 大辻隆夫・塩川真理・田中野枝 (2003) 投影樹木画法における実の教示を巡るBuck法とKoch法の比較研究. 京都女子大学家政学部 児童学研究, 33, 19-23.

- 80) 佐渡忠洋 (2010) 日本におけるバウムテストの研究. 臨床心理学, 10 (5), 674-679.
- 81) 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史 (2010) 実施法がバウムテストに与える影響—同一の描き手に行った個別法と集団法の比較から— 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集. p. 256.
- 82) 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史・伊藤宗親 (2010) 日本におけるバウムテストの文献一覽 (1958-2009年). 岐阜大学カリキュラム開発研究, 28 (1), 33-57.
- 83) 佐渡忠洋・坂本佳織・田中生雅・山本眞由美・緒賀郷志 (2010) 個別法と集団法とで行ったバウムテスト結果の印象の相違—印象評定, マッチング, 検査者体験の検討から. 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 59 (1), 139-146.
- 84) 佐々木貴弘 (2007) 樹木画テスト3枚法におけるウロに関する研究. 創価大学大学院紀要, 29, 207-238.
- 85) 佐藤秀行・鈴木真吾 (2009) 樹木画2枚施行法における樹木の大きさと友人関係との関連. 心理臨床学研究, 27 (5), 581-590.
- 86) 嶋田博行 (1999) 教示. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司 (編), 心理学辞典. 有斐閣. p. 184.
- 87) Stora, R. (1994) *Le test du dessin d'arbre*. 3e éd. Augstin S. A., Paris.
- 88) 多田和外 (2007) バウムテストの実際. 堺・南大阪地域活性化のための拠点としての心理臨床センター報告書, 31-36.
- 89) 高橋依子 (2007) 描画テストのPDIによるパーソナリティの理解—PDIからPDDへ. 臨床描画研究, 22, 85-98.
- 90) 高見良子・中田義朗 (1978) バウムテスト (樹木画による人格診断法) の基礎的研究 (1)—教示を変えた場合の発達指標の量的検討 (予備調査). 西宮市立教育研究所紀要, 180, 33-41.
- 91) 津田浩一 (1976) バウムテストの教示効果について. 心理測定ジャーナル, 12 (3), 5-10.
- 92) 塚崎直樹 (1993) 課題を追加したバウムテストの試み. 日本芸術療法学会誌, 24 (1), 41-47.
- 93) Schliebe, G. (1934) *Erlebnismotorik und zeichnerischen physiognomischer Ausdruck bei Kindern und Jugendlichen : zur psychogenese der Ausdruckgestaltung*. *Zeitschrift für Kinderforschung*, 43 (2), 49-75.
- 94) 鶴田英也 (2005) 本研究の目的と位置づけ—バウムとの関わりの諸相. 山中康裕・皆藤章・角野善宏 (編), *バウムの心理臨床—京大心理臨床シリーズ1*. 創元社. pp. 152-181.
- 95) Waser, C. (2000) *Der Dreibaumtest : ein projektiver Zeichentest zur Beziehungsdiagnostik, Handanweisung*. 2. Auflage. Klotz, Magdeburn.
- 96) 山本廣子・武田由美子 (1976) 幼児期におけるバウム・テストの教示語の理解度. 心理測定ジャーナル, 12 (7), 11-14.
- 97) 山中康裕 (1976) 精神分裂病におけるバウム・テストの研究. 心理測定ジャーナル, 12 (4), 18-23. [山中康裕 (著) 岸本寛史 (編) (2003) 山中康裕著作集5—たましいの形 (芸術・表現療法1). 岩崎学術出版社. pp. 92-103. 所収.]
- 98) 山中康裕 (1999) 心理療法と表現療法. 金剛出版.
- 99) 山崎信弘 (2007) 樹木画テストにおける心理学的サインの妥当性に関する研究. 創価大学大学院紀要, 29, 227-291.
- 100) 山下一夫 (1984) バウム・テストの臨床的研究—精神科入院患者を対象に. 京都大学教育学部紀要, 29, 184-194.
- 101) 横田正夫・伊藤菜穂子・清水修 (1999a) 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討 (第1報). 精神医学, 41 (4), 405-410.
- 102) 横田正夫・伊藤菜穂子・清水修 (1999b) 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討 (第2報). 精神医学, 41 (5), 469-476.
- 103) 横田正夫 (2003) 描画からのアプローチ. 横田正夫・丹野義彦・石垣琢磨 (編), 統合失調症の臨床心理学. 東京大学出版会. pp. 131-153.
- 104) 横田正夫 (2004) 統合失調症 (精神分裂病). 大塚義考 (編), 臨床心理学全書13—病院臨床心理学. 誠信書房. pp. 2-50.
- 105) 横田正夫・伊藤美穂子・青木英美 (2005) 描画をとしてみた統合失調症の5年後予測指標の検討. 平成14-16年度文部科学省科学研究費補助金 (研究代表者; 横田正夫基盤研究 (C) (2) 課題番号14510163) 精神分裂病の予後予測指標の臨床心理学的研究 研究成果報告書. pp. 4-31.
- 106) 横田正夫 (2008) バウムテスト. 小川俊樹 (編), 現代のエスプリ別冊, 投影法の現在. 至文堂. pp. 143-151.
- 107) 横田正夫 (2008) 統合失調症患者の10年経過の臨床心理学的検討. 日本大学文理学部人文科学研究部研究紀要, 76, 119-132.